

徒然草

アルーシャ州地域総合開発計画のディレンマ： 遊牧民を定住させるべきか？

藤村建夫

ミャンマー日本・エコツーリズム会長

1977年、12月のある夕暮れ、キリマンジャロ州の首都モシのモシ・ホテルのテラスは夕日に染まっていた。私たち JICA 調査団のメンバーはホテルのテラスで夕食前のビールを飲んでいて、その時一人のアメリカ人と思しき人が訪ねて来て、「自分は USAID の職員であるが、JICA チームが作成した“キリマンジャロ州地域総合開発計画”のことで教えてもらいたい。」と言って、話しかけてきた。

彼の話では、「タンザニア政府の要請に応じて、スウェーデンが「アルーシャ州地域総合開発計画」を作成して、政府に提出したが拒否された。このため、同じ「アルーシャ州地域総合開発計画」を USAID が作り直すことを要請された」とのことである。その理由は、アルーシャ州にはマサイ族等の遊牧民が多いことから、スウェーデンは、人類学者を派遣して2年間十分な調査を行い、これら遊牧民の伝統文化と遊牧のライフ・スタイルを損なうことがないような総合開発計画を作成した。しかしながら、中央政府は遊牧民の定住化を進めたい、とのことでこの総合開発計画は拒否されてしまった。このため、USAID が別の総合開発計画作成を要請されたのであった。そこで JICA が作成した「キリマンジャロ州総合開発計画」の開発戦略について USAID に教えて欲しい、というのが彼の希望であった。

アルーシャ州はタンザニアの北部、キリマンジャロ州の西隣りに位置し、1976年当時は（マニャラ州の独立は2002年）、面積86,000 km²、人口は約90万人で、大きな面積



Arusha 州と Manyara 州を合わせた部分が1976年当時のアルーシャ州

の割に人口が少ない州である。同州では、遊牧民族であるマサイ族がもっとも有力な部族であった。中央部にはアフリカ大地溝帯（グレート・リフト・バレー）が州の中央を南北に走っている。気候はサバンナ草原に加えて、雨量の多い山地と大きな湖が3つある（ナトロン湖、エヤシ湖、マニャラ湖）。州の西部にはセレンゲティ国立公園の一部とこれに隣接しているンゴロンゴロ国立公園があり、州都のアルーシャは観光客の拠点となっている。

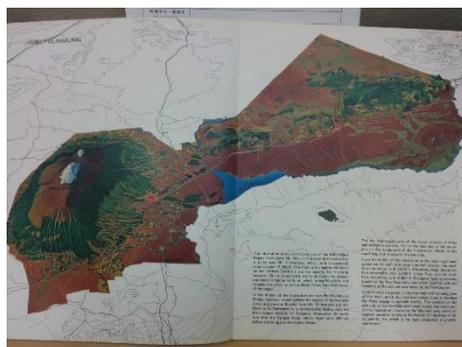
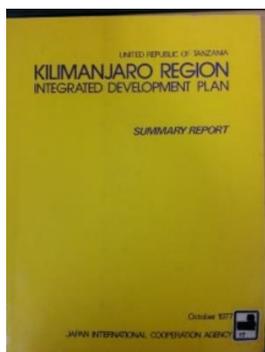
キリマンジャロ州の開発に対する日本の協力は、1970年に経団連のアフリカミッションに対して、時のニエレレ大統領が「明治以来100年の日本の発展をキリマンジャロ

に花咲かせて欲しい」と要請したことに始まった。この要請に従って、日本はキリマンジャロ州開発のための技術協力を要請され、農業チームと工業チームが派遣されることになった。1974年頃、タンザニア政府は1976年から始まる第3次5か年計画に向けて、従来からの中央集権的な開発計画を反省し、州に開発のイニシアチブを持たせた地方政府主導の開発を進めるべく、当時の21州（ダルエスサラム特別市を含む）の地域総合開発計画策定のための技術協力を主要ドナーと国際機関に要請していた。当然のことながら、日本は「キリマンジャロ州総合開発計画（KRIDP）」を要請された。

1974年8月にJICAが設立されてすぐの頃で、JICAの地域総合開発計画策定の経験は浅く、とりあえず予備調査を行って、KRIDP策定の方向性を示した「KRIDPのPreliminary Report（予備報告書）」をタンザニア政府に提出した。これを見たタンザニア政府は、「Preliminary Report」ではなく、「総合開発計画」そのものを作成して欲しいと、突き返してきた。困った日本政府は、その要請にはすぐに応えることが出来ずに時間が経過した。代わりに、当時キリマンジャロ州では、すでに農業開発関連の水調査を実施するため7人の専門家が派遣されており、更に、工業分野では、中小企業開発のために3人の専門家が中小企業の調査を行うことになっていたのので、この二つの技術協力に対応しようとした。

1976年の初め、工業チームの専門家3人がキリマンジャロ空港に到着すると、迎えに来た州知事が「KRIDPを作成して欲しい。もし、作成できないなら、直ちに帰国してくれ」と一行に言い放った。驚いた工業チームはダルエスサラムの日本大使館にかけつけ、「話が違うが、どうなっているのか？問題を解決して欲しい」と訴えた。日本大使館は、「工業チームが人質のような状況となったので、至急KRIDP作成チームを送られたし」という至急電報を本省に打電したのであった。

この緊急事態を打開するために、JICA企画部が中心となって、農林水産部、鉱工業部、開発調査部が一致協力して対応することになり、大規模なKRIDP作成コンサルタント・チームを編成して協力することになった。その結果、35人に上るコンサルタント・チームが編成された。農業分野は現地の専門家チーム7人が協力し、工業分野は現地チーム3人に加えて、新たに筆者を含む3人の専門家がキリマンジャロ州に派遣された。



こうした苦勞の甲斐あって、左のような色彩豊かな「キリマンジャロ州総合開発計画（KRIDP）全4巻（要約、総合計画、農業部門計画、工業部門計画）」は、無事に作成され、タンザニア政府に提出されて、感謝を持って

受領されたのだった。当時、タンザニア政府は社会主義政権下にあり、成長よりも公

平な分配に重きが置かれていたが、日本チームの開発戦略は「成長なくして分配なし」との考えから、団長が首都ドドマの計画省に赴き、「政府の真意は成長よりも公平な分配であるのか？」と問い詰め、「いや成長は重要だ」との言質を引き出した。この結果、KRIDP は成長重視の計画書となった。



マサイ族 出所：
<https://ja.wikipedia.org/>

キリマンジャロ州にもマサイ族は住んでいるが少数で、主要な部族はチャガ族である。チャガ族は非常に優秀で、中央政府の局長クラスの 50%以上を占めていると言われていた。他方、商売上手でケニア国境の密貿易で巧みに財を成しているともいわれていた。また、政府の手前、「ウジャマ村(共同村)」の設立にも表向き協力するが、自分の私有地を中心に耕作していた。チャガ族は教育熱心であり、このため、KRIDP の中でも教育は重要分野として高い就学率が想定された。マサイ族の子供はチャガ族の子供たちが学校に行っているのを見て、父親に対して「チャガの〇〇ちゃんが学校に行っている。僕も学校に行きたい！」と訴える。すると父親は「お前はマサイだから学校に行かなくて良い！」と答えるという。しかし、政府の方針はすでに遊牧民を定住化させることにあった。したがって、KRIDP では人口密度が高い、高地のチャガ族の一部を低地へ移住させることを含め、定住を前提とした学校教育が計画されていた。

USAID の職員に対して、KRIDP の上記「成長重視の開発戦略と定住者の教育方針」を説明したところ、彼は納得して帰って行った。その後 USAID が作成した「アルーシャ州総合開発計画」はタンザニア政府に受け入れられたようである。今では遊牧民が生活している地域の多くは動物公園や国立公園になっているため、遊牧は禁止されている。しかしながら、マサイ族は公園内の遊牧権と季節ごとにケニア・タンザニア国境を自由に超えて家畜を移動する権利を要求し続けている。

それにも拘わらず、政府の遊牧民定住化政策は進んでおり、マサイ族は、現金収入を得られる観光ガイド、夜警、農耕などの職業につく「シティ・マサイ」と伝統的なマサイ村に住んでいる「ヴィリッジ・マサイ」とに分かれてきている。「ヴィリッジ・マサイ」の中には、観光客を受け入れている人達もおり、マサイ族が遊牧生活を続けていくことは年々困難になっているようだ。更に政府は、遊牧民が自然保護区で牧畜や農業に従事することによって、自然保護区の環境が変化することも危惧しているという。

思えば、1976 年当時、右手に長い槍を、左手に袋をもってキリマンジャロの道を黙々と歩いていた長身のマサイ族青年は精悍で、今にもライオンと格闘し、その尻尾を切り取ってしまいそうな気迫を持っていた。だが、時代が進み、遊牧民の定住化は世界的にも時代の流れになってきたように見える。しかしながら、彼らの伝統文化の維持に対しても、一層配慮すべきであろう。今では、右手にスマートフォンを持ってキリマンジャロの道を黙々と歩いている長身のマサイ族に出会うかもしれない。